

第 43 号

● 目次 ●

巻頭言：「学際的研究のための新しい共同研究助成制度」	1
東北アジア研究センター展示・講演会報告「片平まつり 2009」	2
ISTCジャパンワークショップおよび東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部・同極東支部三者間の「覚書」締結について	3
最近の研究会・セミナー等	
・シンポジウム「東北日本とロシアーその過去と現在」および「来日ロシア人研究会」研究報告会	4
・研究会「シベリアの宗教と生態」報告	5
・研究会「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境」	5
客員教授紹介	6
新メンバー	6-7
活動風景	8
編集後記	8



「学際的研究のための 新しい共同研究助成制度」

東北大学東北アジア研究センター

研究推進担当副センター長 奥村 誠



東北アジア地域の特徴の一つは、非鉄金属や石油・天然ガスなどの地下資源に恵まれている一方で、寒冷や乾燥など厳しい気候であり、火山活動や地震などの自然災害にさらされていることである。また東南アジアに比べれば食糧の生産力は大きくなく、人口が安定もしくは減少傾向にあるため、河川堤防やダムのような人工物をたくさん作って災害に対応することが難しい。東北アジア地域の将来の発展のためには、自然の仕組みを深く理解して農業などの人間活動に生かすとともに、気候変化や火山活動の兆候にいち早く気づいて避難などにより最悪の事態を回避する知恵が重要となるであろう。

このような自然に関する知恵は、人間社会の歴史の中で地域ごと、集落ごとに「経験知」、「暗黙知」として蓄積されてきているが、今後地球環境条件が大きく変動すると、これまでの経験則が成り立たなく恐れがある。とすれば、現在地域に蓄積されている知恵を人文科学的手法で発掘すること、それを自然科学における法則性とつぎ合わせて吟味し「形式知」化すること、そして地球環境変化後の社会に「頑健な知識」を提供して役立てる方法を社会科学に検討することが重要となる。

このような、人文・社会・自然科学の各分野の学術を重層的、総合的に活用する学際的なアプローチを推進するため、本センターは2009年度から新しい共同研究助成の制度を立ち上げた。詳細はセンターホームページをご

参照いただきたいが、これまでの共同研究は、特定の地域や現象に対する関心をもともと持っていた研究者が、共同して東北アジア地域の自然・人間・社会をより深く理解するために行う「東北アジア学術深化型研究」に留まることが多かった。今回の制度ではこれに加えて、東北アジア地域が抱える課題を認識する研究者が、本センターの設備・資料や教員の持つ学術を活用して、課題の解決方法を探るための「東北アジア地域課題解決型研究」、自然・人文・社会科学などの学術的知識を持つ研究者が、東北アジア地域の实情に詳しい本センター教員と共同して、その適用フィールドを拡大するための「フィールド適用型研究」も、募集の対象としている。

この制度を活用した研究が、東北アジア地域の国や人々の相互理解と問題解決に寄与し、東北アジア地域社会の平和形成と共生への貢献につながることを期待している。



「アムール虎の剥製と（ロシア沿海州ラソ町の博物館）」

片平まつり2009 東北アジア研究センター展示・講演会報告

従来の片平まつりでは、当センターの展示は流体研究所の一室を借りて行っていたが、今回は片平キャンパスに新築された「さくらホール」の1階を、大会本部と分け合ったスペースで展示を行った(写真1)。好天に恵まれたこともあって、10月10日は752人、11日は888人、計1640人と、従来の2倍以上の入場者があった。受付ではパンフレットの他にモンゴル人形などのお土産を無料配布し、好評だった。当センターの今回のキャッチフレーズは「東北アジア、ワンダーランドへようこそ!」であり、当センターの教員による「トナカイとともにくらす人々」(高倉浩樹)、「遊牧民の国モンゴル」(岡 洋樹)、「減災のための電波科学」(佐藤源之)の3つの展示を柱として、当センター全体の研究紹介や各教員による展示を行った。モンゴルの展示は、さくらホールの北側の芝生に設置したゲル(写真2)



写真1

の中でモンゴル服の試着などを行い、電波科学の展示では、会場内に砂場を設けて入場者に地雷検知の体験をしてもらった(写真3)。また、共同企画として当センター教員が参加しているIODP(統合国際深海掘削計画)の普及キャンペーン展示も行われ、海洋研究開発機構から職員3名が派遣された(写真4)。



写真2



写真3

片平まつり記念講演会はさくらホールの2階で両日とも午後2時~3時に行われ、今回はいずれも当センターの企画のみであった。10日の講演は文系の「現代化と『伝統』中国南部における親族組織の復興現象をめぐって」(瀬川昌久、写真5)、11日の講演は理系の「エンター・ジ・アース地球の謎を解き明かせ」というテーマで「私の深海深堀り体験記」(石渡 明)と「地球の謎は『ちきゅう』におまかせ!」(海洋研究開発機構 阿波根直一)の2本の講演が行われた。事前のポスター掲示やビラ配布の効果もあり、10日の講演は約60名、11日は約50名の来聴者があって、講演後の質疑応答も活発だった。また、来聴できなかった人から後日当センター事務室に講演資料の請求があった。



写真4

このように、今回の片平まつりにおける当センターの展示・講演会(センター内実施委員長 明日香壽川、協力宮本 毅、渡邊 学、大窪和明、コラボレーション・オフィス)は成功だったと言える。

(文:片平まつり2009実行委員 石渡 明、

写真:柳田賢二)



写真5

ISTCジャパンワークショップおよび東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部・同極東支部三者間の「覚書」締結について

2009年10月19日、本学金属材料研究所講堂においてISTCジャパンワークショップが開催された。これは、プロジェクト研究北アジア戦略データベース構築研究ユニットの一部として行われた。木島明博副学長が開会の挨拶を行い、来賓の糸川泰一 文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官よりご挨拶を賜った。次に共催の国際科学技術センター (ISTC) 行松泰弘次長より活動報告が述べられ、分科会に入った。

今回のテーマはNANO、BIO、Environmentで、ロシア科学アカデミーシベリア支部A.L.アセーエフ総裁、同極東支部V.セルゲーエンコ総裁をはじめ両支部に所属するアカデミー会員を中心に総勢14名が本学を訪れて講演を行った。一方、本学は多元研、通研、農学研究科、環境科学研究科から講演があり、さらに、JOGMEC (石油天然ガス・金属鉱物資源機構) から講演があった。

ロシア側は主に最新のナノ技術やバイオ技術の研究成果を中心に報告があった。また、環境技術についても熱心に討論が行われた。ロシアの豊富な資源・エネルギー・食料を背景に、基礎研究を得意とするロシア科学アカデミーと応用研究を得意とする本学との共同研究は、今後国内外からも高い関心が寄せられるであろう。

また、同日は仙台エクセルホテル東急で、東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部・同極東支部三者間の「覚書」が締結された (写真)。内容は次の通りである。

「東北大学と、ロシア科学アカデミー・シベリア支部及び、同極東支部は、これまでの緊密な協力関係の上に、日本及び、ロシアの利益に資するべく発達と進歩に深い関心を持ち、さらに緊密な協力がもたらす相互の利益を認め、自己の研究分野および関連分野における知識の増大を志向し、課題の遂行のため、今後のより一層の協力の発展を希求することをここに確認する。」

井上総長は、両支部との共同研究の成果は国際社会に大きく貢献するものと確信している。ロシアからの留学生受け入れも積極的に進めたいと話した。アセーエフシベリア支部総裁は、連携を深め、共通する課題の解決を図りたいと語った。また、セルゲーエンコ極東支部総裁は、「極東はロシアで最も日本に近い地域。緊密な協力関係を築きたい」と述べた。この様子は翌日の新聞紙上で大きく取り上げられた。

なお、一行は翌日東京へ移動して文部科学省、外務省を表敬訪問した。両総裁は、経団連と科学技術政策研究所訪問で講演を行った。こちらでも予定時間を大幅に越える質疑が交わされ、シベリアの研究所に対する関心の高さがうかがわれた。帰国後、ロシア科学アカデミーシベリア支部の機関紙には今回の様子が大きく報告され、ロシア側も本学ならびに我が国に対して高い関心を示した (新聞記事)。(工藤純一)



写真：ロシア科学アカデミーシベリア支部アセーエフ総裁、東北大学井上総長、ロシア科学アカデミー極東支部セルゲーエンコ総裁による三者間の「覚書」締結。



新聞記事：ロシア科学アカデミーでの報道



最近のセンター研究会・講演会



シンポジウム「東北日本とロシア—その過去と現在」 および「来日ロシア人研究会」研究報告会

(10月31日～11月1日、於金属材料研究所2号館講堂)

10月31日、東北大学金属材料研究所2号館講堂においてシンポジウム「東北日本とロシア—その過去と現在」(共催：来日ロシア人研究会、若宮丸漂流民の会)が開催されました。ロシア漂流民としては大黒屋光太夫が有名ですが、日本人で初めて世界一周をした人物として知られる若宮丸の津太夫が宮城県塩竈市生まれということもあり、宮城県で活動する“石巻若宮丸漂流民の会”メンバーは大勢います。研究者、アマチュアの区別なくお互いの知識を深め合いたい。そんな思いから今回、3団体が集う共催シンポジウムが実現したのでした。当日は一般市民の方の聴講もあり、日ロ交流史への関心が決して少なくないことがうかがわれました。講演では日ロ交流に起因する意外な事実が紹介されるなど、聴講者にとって、今回の催しは隣国ロシアがまた一段と興味深く、身近に感じられる良い機会となったのではないのでしょうか。

【シンポジウム プログラム】

- ・「秋田県のウラーのことなど—『開国への道』の一里塚」中村喜和(一橋大学名誉教授、ロシア科学アカデミー外国人会員)
 - ・「レザーノフの辞書を読む」大島幹雄(石巻若宮丸漂流民の会事務局長)
- ※石巻若宮丸漂流民の会
<http://homepage2.nifty.com/deracine/wakamiya/index.htm>
- ・「江戸時代のロシア漂流日本人とその後」平川 新(東北大学東北アジア研究センター教授)



* * *

11月1日には来日ロシア人研究会の研究報告会が同講堂で開催されました。前日のシンポジウムに続き、研究報告会にも一般参加者の姿が見られ、質疑応答では会場から東北地方在住者の観点からの意見や情報が提供され、活発な議論が展開されていました。研究報告会終了後、研究会メンバーは仙台市内にある仙台ハリストス正教会を訪れ、短期間ながらも密度の濃い2日間となりました。

【研究報告会 プログラム】

- 午前の部(9:30~12:30)：司会 ポダルコ・ピョートル
- ・「『ノーヴォエ・ヴレーミャ』と『ロシア』に見る日本と日露関係の《1906年—1910年》」ミハイロワ・ユリア
 - ・「『月間ロシア』(1935年—1944年)を渉獵して」小山内道子
 - ・「“ヴォークス”をめぐる人々」太田丈太郎

- 午後の部(13:30~17:30)：司会 小山内道子
- ・「映画に見る亡命ロシア人」ポダルコ・ピョートル
 - ・「日本の学校に通った元サハリン流刑囚ビリチの子供たち」倉田有佳
 - ・「仙台俘虜収容所の水兵モケエンコが語るサハリンの冒険談と日本兵の残虐行為」檜山真一
 - ・「宣教師ニコライの東北巡回」長縄光男



なお、来日ロシア人研究会ではこれまでの研究成果を『異郷に生きる』シリーズとして成文社から刊行しています。同研究会の活動にご関心のある方はご参考ください。

(徳田由佳子)



研究会「シベリアの宗教と生態」報告

2009年9月30日午後、東北アジア研プロジェクト研究部門「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究」ユニットの公開研究会として「シベリアの宗教と生態」を行った。このユニットで共同研究を実施しているロシア側のカウンターパートの研究所所長が、仙台を訪問した機会を利用し、講演会を行うと共に、ユニットのメンバーによる中間研究発表を組み合わせるといって実施された。

プログラムは、最初にニコライ・アレクセエフ氏（ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所所長）による「シベリア諸民族の宗教体系とシャマニズム」、つづいて中田篤氏（北海道立北方民族博物館）による「サハ共和国・トンポ地区におけるエヴェンのトナカイ牧畜について」であった。

アレクセエフ氏は、シベリアのシャマニズムの民族学的研究を文献・フィールド双方において蓄積された研究者で、ロシアの人類学・民族学業界のなかでもその手堅い手法と考察によってよく知られた人物である。今回は、シベリアのシャマニズムについて体系的に解説されるとともに、古代国家とシャマニズムの関係についても大胆な議論が提起された。講演はロシア語で行われ、通

訳は藤原潤子氏が務めた。

つづく中田氏は、これまでモンゴルのトナカイ牧民の調査を行ってきたことで知られているが、このユニットのプロジェクトで、シベリアの山岳エヴェンの調査を開始したのである。トンポ地区はソ連時代トナカイ畜産で大きな成果を上げた地域だが、それがソ連崩壊後どのような状況になっているか、特に地球温暖化の影響と合わせて現状を理解することを目的としている。今回は最初の調査で予備的なものだったが、最新の現状について写真やビデオを交えた興味深い報告だった。

なお、アレクセエフ氏の研究所と東北アジア研とはすでに学術交流協定をもっていたが、ロシア側の組織変更によって新たに「ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所」となった当該組織と本センターは新たに部局間学術協定書を締結した。

（高倉浩樹）



研究会「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境」



2009年11月17日（火）、東北アジア研究センター大会議室において「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境」と題した研究会が開かれた。この研究会

では、共同研究「西シベリア塩性湖チャニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析」の最終年度にあたり研究成果のとりまとめのために、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所から3名の共同研究者を招へいして、次の8つの報告が英語によって行われた。

1. 鹿野秀一（東北アジア研究センター）：ノア画像を用いた1999年－2009年間のチャニー湖湖面の年間変動
(Interannual fluctuation in the surface area of the Lake Chany from 1999 to 2009 using NOAA images)
2. 太田 宏（東北大学生命科学科）：両生類の塩分耐性
(Salt tolerance of Amphibian)
3. Elena N. Yadrenkina（動物分類学生態学研究所）：

大きな湖の支流域における魚類個体群の空間的構造
(Spatial organization of fish populations in tributaries of large lake's system)

4. 金谷 弦（国立環境研究所）：カルガット川河口域における、雑食性コイ科魚類の餌利用における種間変動
(Inter-species variation in the food sources of omnivorous cyprinid fishes in the Kargat River estuary)
5. 塩谷昌史（東北アジア研究センター）：統計データからの視点
(From the viewpoint of statistical data)
6. Nataliya I. Yurlova（動物分類学生態学研究所）：ロシア西シベリアチャニー湖生態系における寄生者・宿主関係
(Host-parasite interactions in Chany Lake ecosystem, West Siberia, Russia)
7. 溝田智俊（岩手大学農学部）：ミヤマガラス営巣地をめぐる窒素動態
(Nitrogen dynamics associated with the breeding activity of *Corvus frugilegus*)
8. Alexander K. Yurlov（動物分類学生態学研究所）：ロシア西シベリアチャニー湖の鳥類の生態と渡り
(Ecology and migration of birds in Chany Lake area, West Siberia, Russia)

（鹿野秀一）

客員教授紹介

ガルディ(嘎日迪)内蒙古師範大学教授



12月1日、中国内蒙古師範大学からガルディ(嘎日迪)教授が客員教授として赴任された。本センターには、2010年3月31日まで4ヶ月間滞在の予定。

ガルディ先生は、1954年生まれ。中国内蒙古出身のモンゴル族で、現在は内蒙古師範大学の蒙古学学院に所属し、古代モンゴル語研究部門の主任を務めている。先生の専門はモンゴル文献学であり、中でも13世紀から15世紀に属する「中世期モンゴル語」の文献学的・言語学的研究を中心に行っている。特に顕著な業績として、シルクロードの敦煌(とんこう)莫高窟の石窟壁に残されたモンゴル文の読解と研究、内蒙古オールドス地区のアルジャイ(阿爾寨)石窟の壁面に書かれたモンゴル語の研

究、またトゥルファン、ハラホト等の遺跡から発見されたモンゴル語古文書の研究などを挙げることができる。

著書には、『阿爾寨(アルジャイ)石窟ウイグル式モンゴル文字遺文研究』(1997)や『中古モンゴル語研究』(2001)をはじめ、モンゴル国で1998年に学位を取得した博士論文をまとめた『中古モンゴル語構造形態研究』(2002)、中世期モンゴル語の包括的な入門書である『中古モンゴル語研究導論』(2008)等々がある。

本センターに在任中は、「中世期モンゴル語の文献学的研究」をテーマに研究を行い、プロジェクト研究「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の活動に参加する。

先生の所属する内蒙古師範大学の蒙古学学院と本センターとの間には2009年に学術協力協定が締結されている。先生の今回の赴任は協力協定の実効を高め、今後の研究協力を推進する大きな一歩となるものである。

(栗林 均)

センター新メンバー紹介

鈴木 健太郎(教育研究支援者)



縁もゆかりもない土地・仙台に「移民」してきて十年が経ちました。はじめの頃は新しい環境に慣れるのと、生まれたばかりの息子の世話に時間を取られたこともあり、研究活動はしばらくお休み。その分、男の子育てを存分に楽しむことができました。父親による子育て論が昨

今ひそかなブームとなりつつあるようですが、男性が中心的役割を担う「男の子育て」は今後ますます脚光を浴びていく予感がします。少なくとも私にとって、それは貴重な体験であり有意義な時間でした。と同時に、子育ては移民である私に仙台ネイティブたちとの安定した人間関係を築かせてくれもしました。例えば、何年も同じ保育園に子どもを通わせた十数家族とはいまでも家族ぐるみの付き合いが続いています。もちろん私の場合は所詮おなじ日本の中での移住に過ぎませんので、同列に語

れるかどうか分かりませんが、よその国から移民してきた人たちにとっても、子育てに正面から取り組むことが移住先での暮らしをよりよくする重要なファクターではないかと思えてなりません。子どもの小学校入学を機に再開させた研究活動は、そんな生活者の視点から移民のかかえる諸困難とその要因を明らかにしていこうというものでした。特に東北地方には、海外からの結婚移住者(外国人花嫁とも呼ばれる)が数多く住んでいることもあり、調査すべきテーマに事欠きません。さらに、近ごろは、韓流ブームの正体やその影響を探るべく、韓流の熱心な担い手たちの調査にも着手しました。一見、移民の問題と無関係に思える韓流ブームですが、担い手たちの話を聞けば聞くほど、またその行動を見れば見るほど、なかなかどうして奥が深いのです。これから五年くらいは、こうした調査研究のわらじと、子育てのわらじと、もう一つ、これまた研究とは全く畑違いの事業のわらじとを、忙しく交互に履き替えながら楽しく歩んでいきたいと思っています。

千葉 真弓 (客員研究支援者)



客員研究支援者の千葉真弓です。まちのほこり研究室という、主に地域活性化をお手伝いする会社の代表を務めています。東北アジア研究センターでは、2006年に、CNEAS要覧のデザイン大幅改変のお手伝いを、2007年には片平まつりのコンセプトデザインをさせていただき

ました。2008年には高倉先生にお声がけいただき、さんだいメディアテークでの展示「見れる、さわられる、知の旅 トナカイ!トナカイ!!トナカイ!!! 地球で一番寒い場所での人間の暮らし」制作に参加させていただきました。こういうお手伝いをするまでは、どうして大学はもっと市民還元活動をしないのだろうと思っていました。間近で見て、「必要性は重々分かっているが、時間が無い、ノウハウがない、ノウハウを学ぶ時間もない」という先生方の言葉をたしかに実感しました。よくお聞

きすれば、結構たくさんの講演会などが行われていることも分かりました。ですが、もしかしたら、私たちがお手伝いすることで、同じ労力で、もっと効果的に、市民に「たしかに還元してもらった」という実感と感動を与えられるかもしれません。

デザインにはターゲットがあります。パンフレットなら、内容と相手によって、冊子の大きさ、紙の厚さ、全体の重さ、色彩と色数、文字の大きさと配置、文体、総情報量、構成に全てが変わってきます。立体空間となる展示、時間に支配されるイベントならばなおさら、モノと空間・時間・情報のデザインがあって、初めて相手にメッセージが届きます。人を見て説法せよの実践版です。

何もかもが費用対効果で測られる現在、経済効果で即答しにくい研究の価値を、市民の支持という形で、目に見えるようにしたいというのが、私の願いです。

伝える、呼びかけるという仕事全般、お手伝いします。お声がけ下さい。

千葉 義人 (客員研究支援者)



客員研究支援者の千葉義人です。建築学を学び、空間のプランニングとデザインを生業としています。店舗やレストランなどの商業空間や博物館・資料館を数多く手がけてきました。商品構成計画や展示企画立案から設計、施工、設計監理まで一貫して仕事ができるのが私の強み

です(職人も出来ます・笑)。

縁がありまして、2008年の冬、メディアテークで行なわれた高倉先生のトナカイをテーマとした展示のお手伝いをしました。私の持てる力を十分発揮できた展示でした。日本ディスプレイデザイン協会の展示部門で賞もいただきました。入賞は皆で練り上げた企画案を最後まで堅持した結果だと思っています。

これを機に、センターの公開講演会に通うようになり、広範囲な研究内容の奥深さと面白さ、そして何よ

り、研究内容の有益性を感じるようになりました。

トナカイ展示で確信した事があります。東北アジア研究センターが行っている研究に一般市民は興味と関心を持っています。このファンの裾野を広げる事が出来ると思います。講演に展示がプラスされれば鬼に金棒です。立体的、視覚的、体感的な展示は理解に直結します。簡単に移動可能で、数人で短時間に小展示を組み立てる事も可能です。センターのファンはもちろん、普通の市民、子供から老人までもっと理解できるような内容にコンバージョンしてみませんか?

アイデアは沢山あります。知られる事で研究内容は新たな価値を生むものと考えます。「研究」は先生方の領分で「研究内容を世間にいかにリリースするか」は私の仕事なのです。「やりたい事」があればそれを「かたち」にして見せます。「やりかけ事」があればそれを「もっとよいかたち」にして見せます。気軽に何でも相談してください。



ロシアで日本の人文学を日本語で教える —訪問講座「日本とアジア」について

2009年11月17日から21日の3泊5日という強行軍で、シベリア・ノボシビルスク市において訪問講座「日本とアジア」を行った。これは、東北大学とロシア科学アカデミーシベリア支部の間に設置された共同ラボラトリーの事業のひとつで、両国の学術教育交流の促進を目的とするものである。以前東北アジア研に客員教授として滞在していたノボシビルスク大学・エレナ・ボイティシュク先生の協力を得て、日本とアジアに関する文化・歴史・自然に関する講義を行うこととなった。

本講座の一番の特徴は、ロシアで日本語を学ぶ学生を主な対象として、日本語で授業を行うという点である。文化や歴史に関わる諸問題は、数式とは異なり「言語」に内容が依存するため、翻訳すると意味がどうしてもずれてしまう。そのずれの修正に拘泥するよりは、最先端の研究成果を生かした日本語でそのまま伝える迫力の方が、学生にとって有益だろうという見通しのもと、講座は実施された。

今回は、「想像と表象の歴史学」という題目をつけ、日本列島に暮らしてきた人々が古代から近代に至るまでいかなる想像力をもちながら身の回りや遠い世界を理解してきたのかを共通テーマとした。講義1は「日本の美術にみる自然表現と宗教観」（本学文学研究科長岡龍作教授）、講義2は「宮崎アニメの歴史認識：教育現場への浸透が意味すること」（尚絅学院大学千葉正樹准教授）、講義3は「近代日本人とユーラシア」（本センター岡洋樹教授）、さらにノボシビルスク大学人文学部東洋学科日本語コースの学生による研究発表会があった。

講義には最大100名近い学生が出席した。ノボシビルスク市内の9つの大学から参加者があり、日本への関心の高さと日本語学習の熱心さを垣間見る思いだった。日本をめぐる人文学の知が、ロシアの学生の知的好奇心とぶつかり合うことで新しい可能性を生まれる—そんな予感をえる旅となった。（高倉浩樹）

—ノボシビルスクを訪ねて—

ノボシビルスク大学での訪問講座「日本とアジア」の講師として、今回、初めてロシアを訪れた。11月18日の正午前、北京からのシベリア航空機はノボシビルスク空港に着いた。タラップからターミナルまで歩いたが、想像していた刺すような寒さはなく、冬の千歳空港に降りたような気分である。どことなく懐かしい気がした。エレナ・ボイティシュク先生の出迎えを受け市内へ向かう車からは、広がる雪原に白樺やとど松らしい樹木の森が眺められ、これも北海道の風景を思わせたから、初めて来た国という気はしなかった。シベリア鉄道の開通に伴い19世紀末に建設されたノボ

シビルスクは、ロシアで最も新しい街で、札幌とは姉妹都市だという。札幌で育った私には、それだけでもゆかしい。

大学へ向かう途中、希望を容れてもらい、ノボシビルスクで一番古い教会を訪ねた。昇天するキリストの名を持つその教会は、厳粛な雰囲気満ちており、様々なイコンを掛け廻した堂内が興味深かった。函館のハリストス正教会と山下りんの聖画が思い出された。郊外のアカデムゴルドクに着くと、大学への挨拶を終えて夕食までの間に、学生さんにこの街の教会にも連れて行ってもらった。市街から出外れた森の中の丸太小屋風の教会で、少女たちの賛美歌にしばし耳を傾ける。この国に着いてまだ数時間しかたないが、密やかに息づく信仰の世界にすでにたっぷり浸っていた。

2日間のプログラムの初日の午前、教室で開始時間を待っていると次から次へと学生が集まってくる。文学部の講義室程度の部屋だったからすぐに学生で溢れた。それでも列は途切れず、補助席でも足りずに立ち見まで出た。予想外のこの光景には正直驚かされた。聴衆の熱気に押されながら、「日本美術に見る自然表現と宗教観」という講義を終えた。自然の中に聖なるものを見る東洋の精神を、美術を使って説明した。傾きながら聞く学生も見えたので心地よく講義できたし、初日夕刻の、先生方との交流会でも興味を喚起した様子確かめられて安心した。

日本はエキゾチックな国だという学生の言葉が耳に残っている。ジャポニズム的関心が今も根強く、それゆえロシアには日本文化に強い興味のあることを知った。わずか36時間の滞在だったが、強烈な印象を得た旅だった。貴重なこの経験をさせてくれた、東北アジア研のスタッフの皆さんには心から感謝したい。（長岡龍作）



人文学部長・国際交流委員長への表敬訪問



教室にあふれんばかりに集まった受講生

編集 後記

今号は私柳田が編集担当でしたが、原稿の締め切り日が自身の海外出張と重なったため、実際の編集作業のほとんどをコラボレーションオフィスの小川さんをお願いしてしまいました。しかし、そのためにかえってデザイン面での出来がよくなったようです。ともあれ、今号の編集にかかわる責はすべて私にありますので、もし問題がありましたら私柳田にお申し付けくださるようお願いいたします。（柳田 賢二）